

評価項目	自己評価	
I 教育課程	1. 教育目標	・新入生に対しては新入生説明会、在校生に対しては全校集会・行事等で、保護者に対しては保護者会等で教育目標を周知させた。 ・スーパーグローバルハイスクール（SGH）の目標については、SGHのパンフレットを配布し、生徒・保護者・学校説明会参加者への周知に努力した。
	2. 教育課程の編成	・現行教育課程の意義に則り、適切な運用・実施に努力し、SGH指定校として教育内容のさらなる充実を努めた。 ・SGH後、および新学習指導要領への移行を踏まえ、将来を見据えたカリキュラム編成に向けて、引き続き努力していく必要がある。
	3. 年間授業日数・時数	・学校行事全般の意義を考えながら、必要な授業日数・時数の確保に努めた。
	4. 教育活動とその成果	・各教科とも適切な教育活動に努めた。特に2年生の数学の授業や3年生の英語の授業では少人数学級編成を行い、成果を上げることができた。
	5. 行事	・運営組織に対し適切に指導するとともに生徒の自治意識を高めるよう支援したが、生徒と教員間での意思疎通が十分ではなかった。円滑な行事運営ができるよう、引き続きの徹底と指導の見直しを行ってきたい。
	6. 進路指導	・定期考査前チューター補習を行った。参加生徒数がより増えるように呼びかけに力を入れた。 ・進路指導に関する情報を定期的に生徒および保護者に提供・発信した。 ・進路指導に関連する資料の改訂と保存を行った。 ・キャリア教育に力を入れ、キャリアカフェを複数回開催した。参加生徒数を増加させ、進路への意識をさらに高めたい。
	7. 研究・研修	・SGH指定校として4年目の計画に則り、研究開発を推進した。今年度までの成果と課題をもとに指定最終年度となる来年度に計画を完了させる見直しを持つことができたが、その成果の効果的な普及についてはなお努力が必要である。 ・3月のSGH成果発表会兼公開教育研究会にて生徒のプレゼンテーションやグループワークを公開したことに加え、6月に第1回SGH公開授業を行い、SGHの取り組みや成果を発信することができた。 ・校内研修会を8月に実施した。新しい学力観に基づく評価に関する講演を実施するとともに、進路や学力に関する情報共有・ディスカッション等を行い、新課程を見据えた教育研究の課題を確認することができた。 ・大学と連携した授業研究等を例年通り進めた。 ・教員研究費を図書費・教材費・出張旅費などに活用した。
	8. 帰国・国際教育	・留学・復学に関する手続きを適切に処理するとともに、手続き書式の改善・更新を行った。 ・SGHの活動の一環として、持続可能な社会の探究Ⅰの授業と連携させた2件の研修を実施した。 ①生徒5名、教員1名が8/21～8/27にイオン1%クラブ主催のアジア・ユースリーダーズに参加し、アジア各国の高校生と「食と健康」をテーマに研修・交流を行った。 ②生徒24名、教員3名が10/18～10/21に台湾（台北）を訪問し、台北市立第一女子高級中学との交流を中心とした研修を行った。 ・生徒6名、教員1名が7/1～7/6に台湾（台北）で行われた台湾科学才能フォーラムに参加し、15の国や地域の中学生と交流する機会を得た。 ・お茶の水女子大学に在籍する留学生と放課後に交流する機会を設け、異文化交流と外国語の運用能力の向上を図った。 ・チャールズコンロン大学附属中等学校との交流方法については、検討を継続することとした。
	9. 自治（会）活動の指導	・自主自律の精神を育成するという観点から、自治組織に対する適切な指導・支援を行った。 ・自治会会計について、適切な予算編成、執行、決算、監査がなされるよう、指導・支援を行った。
A 普通教育を 行なう 学校 園 と し て	その他	
	1. 経営・組織	・学校経営計画を立案し、重点目標を決定し、学校評価を円滑に行った。 ・企画運営委員会を25回（予定）開催し、運営体制のあり方や業務内容、組織の見直しを行い、円滑な学校運営に努めた。 ・PTA、教育後援会、同窓会等と連携して教育環境を整えることに努力した。 ・有識者会議の報告を受け、さらなる学校運営・組織の見直しを行いたい。
	2. 出納・経理	・予算委員会・副校長・総務部を中心に、校費・寄付金（運営基金）・諸費用などの予算執行を適切に進めた。 ・SGH予算を実際の研究開発に合わせて変更しつつ、効果的に運用した。
	3. 施設・設備	・校舎改修の概算要求に向けて、校内で協議を重ねるとともに、施設課と準備を進めた。 ・130周年記念事業の一部として、校舎内に残る女高附属女学校時代の仕置の修繕を行った。 ・教育後援会の協力により、テニスコート整備用ローターの補修、コンピューター室のプロジェクト更新、来客用スリッパの更新、教室用折りたたみ椅子の購入、部活動の備品購入などを行った。
	4. 健康	・学校保健安全計画に基づき、生徒の健康の保持・増進ならびに安全教育に努めた。 ・生活会議においては教員全体の情報共有と共通理解をはかり、カウンセラーや担任団との連携を取りつつ、個々の生徒に対する健康相談および支援を行った。人間関係構築に関する初期段階のかかわりについて、集団指導の在り方を含めて模索する必要がある。
	5. 安全	・減災の観点から、大学と連携して安全管理体制を見直し、その充実を努めた。 ・防災訓練を適切に実施するとともに、防災設備を確認し、防災用品の防災倉庫への機能的な配置を検討した。 ・「東京防災」および「お茶の水女子大学防災教育テキスト」を活用して、安全管理に関する指導を適切に行なった。 ・施設課の支援により、附属学校園避難マニュアル（附属高校編）を作成し、災害時の避難体制を再確認した。 ・大学のマニュアル・ガイドラインの改定・作成に合わせて、来年度は高校の「安全管理マニュアル」の更新が必要である。
II 学 校 運 営	6. 情報	・校内ネットワークの一部再編成し、より安全なネットワークにした。 ・ネットワークの再編成の影響で、ネットワークの可用性が一時的に低下した。今後は可用性を高めていきたい。 ・情報資産の再点検を行った。来年度も継続して行う予定である。
	7. 開かれた学校	・37件（1/17現在）の活動報告を更新するなど、ホームページを効果的に運用した。 ・6月と9月に学校説明会を開催した。第2回は輝煌祭と同時開催として集客を図った。（参加者数—第1回：228組 458名、第2回：322組 598名） ・6月と11月に保護者授業参観を実施した。（参観者数：6月119名 11月77名） ・学校評議員会および学校関係者評価委員会6月と2月に開催し、学校運営および学校評価について有益な助言を得た。 ・8月に第21回中学生向け理数一日体験授業を実施した。6講座を開講し、79名の中学生が参加した。
	8. 入学検定	・入学検定を公正・適切に実施するよう努力し、実施した。 ・入試問題の作成においては、昨年度に引き続き作成日程の見直しを行うとともに、チェック体制についてもさらに強化した。 ・天候不具合や感染症等の非常時における対応についても今後さらに検討していく必要がある。
	9. 保護者との連携	・保護者と学校間の連絡を適切に行い、意思の疎通を図った。 ・PTA活動の効率化を図った。 ・PTAと教育後援会の役員懇談会を開催し、連携を図った。
10. 学年活動	1学年	・高校生としての自覚を持ち、よい生活習慣・学習習慣を確立できるよう指導した。 ・学校行事や委員会・部活動において、自主自律の精神、他者と協働する姿勢について継続的な働きかけが必要である。 ・学習のガイダンスを定期的に行い、学習意欲の向上と基礎学力の定着を図った。 ・進路講演会（卒業生、外部講師など）やお茶大キャリアガイダンス等を通じて、自分の将来像を考える機会を提供し、進路選択の可能性を広げられるよう支援した。
	2学年	・諸活動において、中心的存在として協働して活動に当たることができるように支援した。特に各種行事では運営全般を担うことができたようにした。一方で、計画・運営の流れの中で、十分に助言できない部分があった。今後もこの取り組みを継続していきたい。 ・基本的な生活習慣については、1学年で身につけた習慣を維持させることができた。今後この取り組みを継続していきたい。 ・学習・進路指導では、学力テストを複数回実施することで学習到達度を確認するとともに、授業ならびに小テスト・定期考査等を通じて学力の定着を図った。卒業生を招いての進路講演会や進路通信、個人面談を通じてキャリアについて考え、決定する機会となるようにした。
3学年	・学年一斉LHRの機会を充実させ、進路や大学入試に関する情報を共有し各学級の個別面談に生かすなど、生徒の主体的な進路選択を促した。 ・進路通信などを通じて、生徒一人一人の授業への主体的な取組を計画的に自己評価させ、授業及び家庭学習への生徒の取組の質を向上させることができた。 ・時間管理や清掃、集団におけるリーダーシップの発揮など、1年次からの重点目標について継続的に振り返らせ、後輩の模範となるよう生徒たちが自律的に行動に移すことができた。	
その他		

I 大 学 と の 附 属 校 園 と し て	1. 連携研究	<ul style="list-style-type: none"> ・大学および附属校園との連携研究を適切に行うよう努力した。 ・大学関係の研究調査依頼が1件あり、調査に協力した。 ・高大連携実施委員会が6回開催され、高大連携特別教育プログラムの実施・運営に協力した。 ・各教養基礎教科は大学教員とのカリキュラム研究を行った。 ・大学の公開授業をのべ54名の生徒が受講した。 ・「選択基礎」を8名（文教育6名、理学部1名、生活科学部1名）が受講し、特別入試で8名がお茶の水女子大学に進学することになった。 ・学校教育研究部を中核とするら附属校園間の連携研究に17名が参加し、研究に寄与した。 ・学校教育研究部の協力の下、附属高校生向けキャリアガイダンスが全学部で実施された。 ・大学院キャリア副専攻（教員）プログラムでは、保健体育科1名を受け入れ、研究に協力した。 ・大学のサマープログラム（英語）に生徒のべ22名が参加するなど、グローバル人材育成・男女共同参画推進本部と連携し、グローバル女性人材の育成に取り組んだ。 ・東京工業大学サマーチャレンジに3年生8名が参加した。特別選抜には3名が合格し、さきかけ教育を受講した。また、12月にはウィンターレクチャーを実施し、1、2年生全員および3年生希望者が受講した。 ・お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所との共催により、ブリヂストン社のKarbowiak氏を講師にお招きして、グローバル女性リーダーとの対話集いが開かれ、本校生徒30名が参加した。 ・お茶の水女子大学 ノーベル化学賞受賞者 ジャン＝ピエール・ソヴァージュ教授 特別講義に、生徒22名（1年13名+2年9名）が参加した。 ・お茶の水女子大学 ノルウェー首相講演会に、生徒12名が参加した。
	2. 授業交流	<ul style="list-style-type: none"> ・大学や附属学校園との授業交流や授業公開を行うよう努力した。 ・教養基礎の国語・数学・英語、グローバル地理、化学基礎、化学、生物、および総合的な学習の時間で、大学の教員による授業を実施した。
	3. 教育実習	<ul style="list-style-type: none"> ・前期24名、後期18名の教育実習生を受け入れ、教育実習および事前・事後指導を通じて、教科指導の専門性や教員としての資質・能力を向上させるべく指導に努めた。 ・文化祭や学校説明会の運営補助などを通して、登壇実習以外の教員の職務を経験させ、実習をより有意義なものとした。 ・教育実習専門部会との連携を密にし、実習が有意義に行われるよう指導に努めた。 ・教職実践演習の一環として11月に授業参観を実施した（参観学生は32名）。
	4. 専門委員会	<ul style="list-style-type: none"> ・各専門委員会はその目的に沿って適切に活動した。 ・附属学校園連絡進学ワーキンググループ、中高連絡進学検討会で連絡進学のあり方についても検討を行った。
	5. 大学の講義担当	<ul style="list-style-type: none"> ・6教科8名の教員が教科教育法の授業を担当し、高校での授業見学も含めて、その効果が上がるように実施した。 ・教職実践演習を含む教科教育法以外の授業（3科目）を4名の教員が担当した。
	6. インターンシップ	<ul style="list-style-type: none"> ・学部インターンシップの学生については、グローバル地理で1名、国際協力でジェンダーで1名、図書室で1名、家庭科で2名を受け入れ、研究に協力した。
II 社 会 貢 献	その他	
	1. 授業参観 研修生の受け入れ	<ul style="list-style-type: none"> ・外部からの授業参観・学校訪問等を4件受け入れた。
	2. 公開教育研究会開催	<ul style="list-style-type: none"> ・6月に第1回SGH公開授業を行い、日頃の授業の様子を発信することができた。 ・3月にSGH成果発表会兼公開教育研究会を開催し、生徒のプレゼンテーションやグループワークの公開、研究協議を実施し、SGHの取り組みや成果を社会に発信した。
	3. 初任者研修・現職研修	(2017年度該当なし)
	4. 途上国支援	(2017年度該当なし)
	5. 出版活動	<ul style="list-style-type: none"> ・研究紀要を適切な内容で適切な時期に発行し、お茶の水女子大学教育・研究成果コレクションTeaPotへ掲載した。 ・SGH指定校として、報告書、生徒論文集および英字新聞を作成した。
	6. 各種研究会への協力	<ul style="list-style-type: none"> ・講師等派遣依頼が7件あった。 ・学内外の研究会等に積極的に参加した。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・3月にSGH成果発表会を実施し、1年間の探究活動の成果を発表した。 	

2017(平成29)年度 学校評価(自己評価)重点目標まとめ

1. 研究・研修(A-I-7)

- ・SGH指定校(4年目)として研究開発に取り組む。SGH成果発表会(兼公開教育研究会)を開催し、その成果を教育実践に活かす。
 - ⇒ これまでの改善の積み重ねにより指定最終年度となる来年度に計画を完了させる見通しを持つことができた。成果の効果的な普及についてはなお努力が必要である。
- 3月のSGH成果発表会兼公開教育研究会にて生徒のプレゼンテーションやグループワークを公開したことに加え、6月に第1回SGH公開授業を行い、SGHの取り組みや成果を発信することができた。

2. 帰国・国際教育(A-I-8)

- ・SGHの活動の一環として、台北研修を行う。・イオン1%クラブ主催のアジア・ユースリーダーズプログラムに参加する。
 - ⇒ ・SGHの活動の一環として、「持続可能な社会の探究I」の授業と連携させた2件の研修を行ったほか、さらに1件の海外研修を行った。
 - ①7月に1・2年生6名と教員1名が台湾(台北)で行われた台湾科学才能フォーラムに参加し、15の国や地域の中学・高校生と交流する機会を得た。教員も教員対象のプログラムに参加し、理科教育について他国の参加者との情報交換を通じた研修を行った。
 - ②イオン1%クラブ主催アジア・ユースリーダーズは8月に日本(東京・茨城・神奈川)で行われ、参加した5名の生徒はアジア5カ国の高校生とともに「食と健康」をテーマとする研修を行った。
 - ③10月に2年生24名が台北市立第一女子高級中学との交流を中心とする台湾研修に参加し、研修の成果を課題研究に結びつけることができた。

3. 安全(A-II-5)

- ・減災の観点から、大学と連携して安全管理体制を見直し、その充実に努める。
 - ⇒ 施設課(環境安全)の協力により「附属学校園避難マニュアル(附属高等学校編)」が作成され、大地震の際の対応をより明確にすることができた。

4. 保護者との連携(A-II-9)

- ・PTA活動の効率化を図る。
 - ⇒ PTA連絡委員会の当番校が行ってきた附属校園合同の講演会・音楽会等の開催を来年度から義務化せず、附属校園PTA間の連絡調整を主体とすることとした。

5. 連携研究(B-I-1)

- ・筑波大学附属高等学校と連携してキャリア教育を行う。
 - ⇒ 大学および筑波大学附属高等学校と合同でキャリア教育プログラムの開発を行い、両校の卒業生を招いてのキャリアカフェを複数回開催した。プログラムを改善し、参加生徒数を増加させ、進路への意識をさらに高めることが次年度の課題である。